

# マイ・ストーリー

## 玉城俊一

たまき しゅんいち

### ぼくはこんな人

明るい性格で、よく笑います。活動的で、いつも何かやっていると、もったいないと思ってしまいます。やりたいと思ったことは、すぐ実行に移さないと気がすまない。そして、やるからには、中途半端は嫌いで、何でも一生懸命やります。でも、余裕をもって、楽しみながらやることも忘れないようにしています。好きなことをやって楽しく生きていきたいし、後悔はしたくありません。そのためにひとつひとつ目標をたててがんばっています。

ぼくは、楽天的でも考えていないようにみえるかもしれませんが、実はちょっとしたことで深く悩んでしまうような、神経質でおく病な一面もあります。人の目も気になります。何か壁にぶつかって、いろいろ悩んで、考えて、気持ちに整理をつけて、前に進む。いつもその繰り返しです。本当は、もうちょっと要領よく生きたいと思っているのですが、なかなかそういきません。それから、自分勝手に、忘れっぽい。前の日に言ったことを、翌日はすっかり忘れていたりします。

### おいたち

#### 小さいころ

ぼくは、1982年に沖縄県那覇市の病院で生まれました。ぼくの家がある伊是名島には小さな診療所がひとつあるだけです。だから、伊是名島の人は本島の病院で出産します。

小さいころのぼくは、とてもやんちゃで、母の言うことをちっともきかなかったようです。

#### 小学生のころ

小学校低学年のころは、内気で、自分から積極的に行動したり、人前に出たりするのが苦手でした。自信がなくて、人の目をかなり気にしていたのかもしれませんが。

小学4年生のときに、人に勧められるまま、たばこを吸うようになりました。最初は軽い気持ちでした。でも、それをきっかけに、いつのまにか悪いことをする先輩たちの仲間になって、店で万引きをしたり、バイクや車を盗んで乗りまわしたりするようになっていました。悪いことをしていると、正直言ってこわいという気持ちもありました。けれど、そういう悪いことをしてみたいという好奇心みたいなものも強かったのだと思います。それに、たとえやりたくないと思っても、先輩たち

に逆らうことはできませんでした。母は、ぼくの行動に気づいて、厳しくしかったり、わざとつきはなしてみたり、必死に悪いことをやめさせようとしてきました。でも、ぼくは何を言われても口ごたえばかりして、母の言うことをきこうとしませんでした。こんな状態が中学2年生くらいまで続きました。

## 中学生のころ

中学2年生のとき、ぼくは伊是名尚円太鼓という太鼓グループに入りました。尚円太鼓の練習は夜にあるので、メンバーになれば夜も堂々と遊ぶことができるという安易な動機でした。ところが、尚円太鼓のメンバーたちは真剣に音楽に取り組んでいました。そんなメンバーたちに刺激を受けて、ぼくも真剣に音楽に取り組むうち、音楽の楽しさを感じるようになったのです。母の影響もあって小さいころから歌は好きでしたが、このときからシンガー・ソング・ライターになりたいというはっきりした夢をもつようになりました。

それと同時に、悪いことをやめたいと思うようになりました。でも、なかなかやめることができずにいました。そんなある夜、友だちに誘われて、車を盗み、ドライブに出かけました。その車にはターボエンジンがついていて、アクセルを踏むとすぐにスピードが出ました。ぼくたちは時速120キロメートルのスピードでカーブに突っこんでいきました。そして、そのカーブを曲がりきれず、車が横転してしまいました。幸いにも、2人ともけがはしなかったけれど、かなりこわい思いをしました。そのとき、「もう絶対に悪いことはしない」と自分に誓い、たばこや盗み、そのほか悪いことは

すべてやめました。親に対しても反抗ばかりしていたけれど、「何もできないくせに反抗ばかりしてたら、ただのあほやっさ。まず、ちゃんとやるべきことをやろう」と考えました。

ぼくは、たとえそれが昨日までやってきたこととまったく違うことであっても、あるひとつの方向に向かって猪突猛進するようなところがあります。このときも、音楽やサッカー部の練習に熱中するようになりました。また、中学3年生のときには、推薦<sup>4</sup>で高校に合格したあと、同じように推薦入学が決まった同級生たちに呼びかけて「Little Teacher」というグループをつくり、これから入試をうける同級生たちに科目を分担して教えました。どういうポイントを教えたらいいか、どうやって教えたらいいか、あらかじめ先生たちに聞き、きちんと準備をしてから教えしました。

## 高校生活

### 南風原高校へ

沖縄は大小160の島々で成りたっていて、そのうち人が住んでいる島は50くらいです。高校がある島は沖縄本島を含めて3島だけで、ほとんどの島には高校がありません。伊是名島にも高校がないので、伊是名島の子もたちは中学校を卒業すると本島の高校に入学します。ぼくも、那覇市のすぐ隣の南風原町にある県立南風原高校に通うことになりました。伊是名島から南風原町まで、船とバスを乗りついで4時間以上かかります。伊是名から通うことはとてもできないので、那覇のおば(父の姉)の家に下宿しています。

南風原高校には、郷土文化コース、文理コース、体育コース、教養コースがあります。ぼくが南風原高校に入りたいと思ったのは、郷土文化コースがあったからです。郷土文化コースでは、数学、英語など一般的な科目のほかに、琉球歌や沖縄のことは、三線、琉球舞踊、琉球空手、沖縄の歴史などについて勉強します。高校で沖縄の芸能や歴史を勉強すれば、将来、自分の音楽をつくっていくうえで役にたつだろうと考えました。

## 伊是名とのギャップに苦しむ

那覇に住み、南風原高校に通うようになってく、伊是名にいるときには経験したことのない居心地の悪さを強く感じるようになりました。伊是名にいたころは、だれとでも友だちのようにオープンに親しく話をし、いつも心と心でふれあっているという感覚がありました。伊是名では、それがあたりまえのことで、とくに意識もしていませんでした。でも、ここに来てから、相手と距離をおき、自分の本心と違うことを話す人が多いのにショックをうけました。人口が多いせいなのかもしれない。

南風原高校では、生徒たちのノリが悪いし、ムードが暗いと感じました。楽しくやろうと思えばできるのに、だれもそうしようとしな。島にいたときと同じように楽しくしたいと思って、いろいろやればやるほど、自分が周りからういていくのを感じました。なかでも、いちばんショックだったのは、ぼくが友だちだと思っていた人たちまでもが、本音と違うことを話しているということでした。

その人たちのことばを素直に信じて行動したのに、それを否定されたり、全然違うことを言われたりしました。そういうことが何度か続き、だんだん人が信じられなくなっていきました。「人の悪いところ、いやなところをこれ以上みたくない。もう人とあまりかかわりたくない」と思うようになってしまいました。

ぼくは、明るくて人づきあいが得意そうに見えるかもしれませんが、でも、今でも初対面の人と話すのはこわいと思っています。うわべだけの会話をすることも多くなりました。「人間ってむずかしい」と感じます。それでも最近では、三線仲間など、信頼して本音でつきあえる友人たちもできてきました。

## 生徒会長を経験して

2年生になるころには、もう学校をやめたいとまで思いつめていました。でも、あれこれ思い悩んでいくうちに、ここでやめても何にもならないという気持ちがわきあがってきました。「だったら、生徒会長になって、自分でこの学校を明るく楽しい学校に変えよう!」と思いなおしました。そして、生徒会長選挙に立候補して当選し、2年生の2学期から1年間、生徒会長をつとめることになったのです。

生徒会長になってから、みんなをまとめていく立ちのむずかしさを知りました。1人ひとりの気持ちを大事にしたいけれど、何かを実行するとき全員の意見を反映させるのはむずかしい。自分の意見を言えば、違う意見の人たちから反感をかう。そんなことを考えていると、どんどんおく病に

なって、何も実行に移せなくなります。でも、友だちに「おまえバカかっ! 本当に学校を変えたいなら、人に嫌われる覚悟でやれっ!!」と励まされたりしながら、何とかやっています。

今でもときどき悩むことはありますが、「ここで挫折したら、もとのまんま。前向きにやんなきゃ」と思うようにしています。みんなにとっていちばんいいと思うことを実現するために、これからはもっと意志を強くもって取りくむつもりです。「ま、ちょっとくらい嫌われてもいいか」と、気楽にかまえるようにしたいと思います。

## おんがく 音楽について

ぼくの生活の中心は音楽です。ギターや三線で曲をつくって歌ったり、授業や部活で沖縄の古典音楽や民謡を習ったり、伊是名尚円太鼓のメンバーとして活動したりしています。どの活動も好きで、一生懸命やっています。もちろん、それぞれ違うジャンルの音楽なのですが、ぼくには、これは伝統音楽、これは太鼓、これはギターの曲とわけて考えることができません。つきつめれば同じ「音楽」をやっているわけだし、ぼくにとってはすべてが「音楽」なのです。

ぼくがめざしているのは、自分の経験をいかして、独自の音やリズムをつくりだすことです。たとえば、牛の鳴き声は1頭1頭違います。ある牛は、「モーッ」と鳴くかもしれないし、ある牛は、「モオオウッ」と鳴くかもしれません。同じように、人がもっている音やリズムは1人ひとり違うと思います。沖縄の古典音楽や民謡には楽譜に表せない部分があります。同じ曲を表現して

も、人によって微妙に違いがあったりします。その違いが、1人ひとりの持ち味であり、理論や技術では生みだすことのできないものだと思います。ぼくは、自分の感性を大事にしながら、自分の思いを音楽のなかで自由に表現していきたいと思っています。

音楽は、ぼくにいろいろな機会を与えてくれます。今年の夏に伊是名島で「いぜな尚円まつり」があり、尚円太鼓も出演しました。ぼくは新しい曲をつくり、その演出も担当しました。曲をつくりあげていくこと以上にむずかしかったのは、人をまとめていくことでした。1人ひとりのことを考えすぎると、優柔不断になったり、弱気になったりします。でも、みんなでいい演奏をするためには、少し強引なくらいのリーダーシップも必要だと考えるようにしました。その結果、本番に向けてベストを尽くすことができたと思います。たぶん、生徒会や郷土芸能部の活動で経験したことも役にたったのでしょう。祭りまでの過程はしんどかったし、本番の演奏は必ずしも満足のいくものではなかったけれど、自分にとってプラスになるいい経験だったと思います。

## しょうらい 将来について

シンガー・ソング・ライターになろうという思いは、中学生のときから変わりません。これまで、高校を卒業したらすぐシンガー・ソング・ライターになろうとか、アメリカの大学に留学して本格的に音楽を勉強しようとか、いろいろ考えてきました。でも、気持ちだけがからまわりして、ちょっと

げんじつ み か  
現実味に欠けているところもありました。目標が  
あるからこそ、「あれもこれもやらなきゃ。でも、時  
かん た  
間が足りない!」と、あせっていたんだと思います。  
いま おんがく いっしょう  
今は、「音楽を一生やっていくんだったら、あせら  
なくていいや」かんが じもと げいじゆつだい  
と考えています。地元の芸術大  
がく おきなわ こてんおんがく べんきょう つづ  
学なら、沖縄の古典音楽の勉強も続けられるし、  
べんきょう かいがいこうえん い  
クラシックも勉強できるし、海外公演にも行けま  
す。その大学を受験しようかなと思っています。

## かぞく とも 家族・友だち

### かぞく ぼくの家族

み ちか  
身近すぎて、いてもいなくても同じように思え  
るけれど、どこかでぼくの大きな支えになってい  
るかん おお ささ  
と感じます。とくに、親元を離れて学費や生活  
ひ し おく  
費を仕送りしてもらうようになってからは、親のあ  
りがたさやたいへんさがわかるようになりました。  
じ ぶんひとり い  
自分1人で生きているのではないということを実  
かん しごと かね かせ こ  
感しています。「仕事をしてお金を稼ぎ、子どもを  
にん そだ ほんとう  
6人も育てているなんて、本当にすごいなあ。感  
しゃ  
謝しなくっちゃ」とおも におも  
思っています。ぼくは6人兄弟  
ちやうなん おとうと しんばい  
の長男ですが、弟たちのことはあまり心配してい  
ません。こころ  
心がくさっているやつはいないので、ぼ  
くがとやかくいわなくてもだいじょうぶだと思っ  
て  
います。

### とも ぼくの友だち

うわべではなく本音でつきあえる友だちは、ぼ  
くにとって絶対に必要な存在です。そういう友だ  
ちとは、くる たの しみをともに分かちあうこと  
ができます。かのじょ わか とも  
彼女と別れたりしたときも、友だちは  
そばにいてくれます。そういう意味でも友だちは

たいせつ そんざい  
大切な存在です。でも、ほんとう まわ ひと  
本当はぼくの周りの人す  
べてが大切なんだと思います。ぼくはまわ ひと  
まわ ひと  
ら支えられて生きているし、どんなにいやな人  
でも、どこかでぼくのちから  
力になってくれているはず  
です。そうかんが  
考えるようになったのは、ぶ たいかつどう  
舞台活動など  
けいけん じ ぶん ちから  
を経験して、自分の力だけでできることはとても  
すく ほんとう じ ぶんひとり ちから  
少なくて、本当にいいものは自分1人だけの力  
で  
は絶対できない、ということを手学んだからです。  
れんあい ひと ひと  
恋愛は、人と人がつきあうわけだから、必ず  
ぶつかったり、たが  
お互いのいやなめん  
面がみえてきたり  
するとおも  
思います。でも、そういうところもひっくる  
めてお互いにあい  
愛しあうことができればいいなと思  
います。あいて かりかい どりよく  
相手は、ぼくを理解しようと努力してくれ  
るひと する わる  
人、そして悪いところは悪いと言ってくれる人が  
いいです。たが たか  
お互いに高めあいつつも、いっしょに  
いてお かんけい り そう  
落ちつける関係が理想です。

## ぼくのしま、いぜなしま 島の島、伊是名島

いぜなしま おきなわ ぼくぶ  
伊是名島は沖縄の北部にあって、フランスを小  
さくしたようなかたち  
形をしています。しゅういやく  
周囲約18キロメー  
トル、じんこうやく 2,000  
人口約2,000人の小さな島です。第二尚氏  
おうちやう 8 ひら しょうえんおう う とち しま  
王朝<sup>8</sup>を開いた尚円王<sup>9</sup>の生まれた土地で、島  
のひと  
人はそれをとてもほこ  
誇りにおも  
思っています。  
なつやす ぶゆやす しょうえんたいこ  
夏休みや冬休みのほか、尚円太鼓のイベント  
があるときなど、ねん かい いぜな かせ  
年に10回くらい伊是名に帰ら  
す。いぜな しぜん  
伊是名の自然のなかにいると、こころ やす  
心が安らぎま  
す。な は み そら かん  
那覇で見える空はせまく感じるけれど、いぜな  
の空は  
そら むげん ひろ  
無限に広がっているようにおも  
思えます。浜で  
ひとり ぞら み  
1人、空を見あげていると、だれもないじぶん  
だけの  
せかい かん なみ おと かせ  
世界を感じます。波の音や風のそよぐ音、鳥

のさえず<sup>こえ</sup>る<sup>き</sup>声を聞いたりしていると、いろいろな  
イメージが頭<sup>あたま</sup>にうかんできます。そのイメージを曲<sup>きょく</sup>  
にすることもあります。伊是名<sup>いぜな</sup>は小さな島<sup>しま</sup>です。で  
も、そこにはとてもおおきな世界<sup>せかい</sup>が広が<sup>ひろ</sup>っているよ  
うに感じ<sup>かん</sup>られます。伊是名<sup>いぜな</sup>の豊かな自然<sup>しぜん</sup>がそう  
感じ<sup>かん</sup>させるのかもしれませんが。ぼくは、ものごと  
を大き<sup>おお</sup>く<sup>おお</sup>とらえたいし、スケール<sup>おんがく</sup>の大きな音楽<sup>おんがく</sup>を  
つくりたい<sup>おも</sup>と思っているので、伊是名<sup>いぜな</sup>の「大きな世  
界<sup>かい</sup>」はとても魅力的<sup>みりょくてき</sup>です。

将来<sup>しょうらい</sup>、島<sup>しま</sup>に帰<sup>かえ</sup>るかどうか、今<sup>いま</sup>はまだわかりま  
せん。親<sup>おや</sup>は、「好きなこと<sup>す</sup>をやればいいよ」と言<sup>い</sup>っ  
てくれています。太鼓<sup>たいこ</sup>を続<sup>つづ</sup>けていくなら、尚円太<sup>しょうえんだい</sup>  
鼓<sup>こ</sup>の人<sup>ひと</sup>たちとやりたい<sup>おも</sup>なあとおもいます。